



2019年本屋大賞ノミネート作発表

作品名 五十音順
4月9日 大賞作品結果発表



『愛なき世界』 三浦しをん(著) 【2019.1 配架】

洋食屋の見習い・藤丸陽太は、植物学研究者をめざす本村紗英に恋をした。しかし本村は、三度の飯よりシロイヌナズナ(葉っぱ)の研究が好き。人生のすべてを植物に捧げる本村に、藤丸は恋の光合成を起こせるのか。世界の隅っこが輝きだす草食系恋愛小説。



『ある男』 平野啓一郎(著) 【2019.3 配架予定】

彼女の夫は「大祐」ではなかった。夫であったはずの男は、まったくの別人であった…。人はなぜ人を愛するのか。幼少期に深い傷を背負っても、人は愛にたどりつけるのか。人間存在の根源と、この世界の真実に触れる文学作品。



『さざなみのよる』 木皿泉(著) 【2018.7 配架】

小国ナスミ、享年43。その死は湖に落ちた雫の波紋のように家族や友人、知人へと広がり——命のまばゆさを描く感動と祝福の物語！



『そして、バトンは渡された』 瀬尾まいこ(著) 【2018.7 配架】

森宮優子、十七歳。継父継母が変われば名字も変わる。だけどいつでも両親を愛し、愛されていた。この著者にしか描けない優しい物語。「私には父親が三人、母親が二人いる。家族の形態は、十七年間で七回も変わった。でも、全然不幸ではないのだ。」身近な人が愛おしくなる、著者会心の感動作。



『熱帯』 森見登美彦(著) 【2019.1 配架】

沈黙読書会で見かけた『熱帯』は、なんとも奇妙な本だった！
謎の解明に勤しむ「学団」に、神出鬼没の古本屋台「暴夜書房」、鍵を握る飴色のカードボックスと、「部屋の中の部屋」…。東京の片隅で始まった冒険は京都を駆け抜け、満州の夜を潜り、数多の語り手の魂を乗り継いで、いざ謎の源流へ…！



『ひと』 小野寺史宜(著) 【2019.3 配架予定】

柏木聖輔は20歳の秋、たったひとりになった。大学を中退し、仕事を探さなければと思いつつ、動き出せない日々が続く。そんなある日の午後、砂町銀座商店街の惣菜屋でコロッケを見知らぬおばあさんに譲った。それが運命を変えとも知らずに…。
そんな君を見ている人が、きつというー。



『ひとつむぎの手』 知念実希人(著) 【2018.11 配架】

大学病院で過酷な勤務に耐えている平良祐介は、医局の最高権力者・赤石教授に、三人の研修医の指導を指示される。彼らを入局させれば、念願の心臓外科医への道が開けるが、失敗すれば…。さらに、赤石が論文データを捏造したと告発する怪文書が出回り、祐介は「犯人探し」を命じられる。個性的な研修医達の指導をし、告発の真相を探るなか、怪文書が巻き起こした騒動は、やがて予想もしなかった事態へと発展していく…。



『火のないところに煙は』 芦沢央(著) 【2018.10 配架】

「神楽坂を舞台に怪談を書きませんか」突然の依頼に、作家の「私」は、かつての凄惨な体験を振り返る。解けない謎、救えなかった友人、そこから逃げ出した自分。「私」は、事件を小説として発表することで情報を集めようとするが…。予測不可能な展開とどんでん返しの波状攻撃にあなたも必ず騙される。一気に読み不可避、寝不足必至!!読み始めたら引き返せない、戦慄の暗黒ミステリ！



『フーガはユーガ』 伊坂幸太郎(著) 【2019.1 配架】

常盤優我は仙台市のファミレスで一人の男に語り出す。双子の弟・風我のこと、決して幸せでなかった子供時代のこと、そして、彼ら兄弟だけの特別な「アレ」のこと。僕たちは双子で、僕たちは不運で、だけど僕たちは、手強い。

『ベルリンは晴れているか』 深緑野分(著) 【配架未定】



1945年7月、4カ国統治下のベルリン。ドイツ人少女アウグステの恩人にあたる男が、ソ連領域で米国製の歯磨き粉に含まれた毒により不審な死を遂げる。アウグステは疑いの目を向けられつつ、彼の甥に訃報を伝えるべく旅立つ。しかしなぜか陽気な泥棒を道連れにする羽目になり…ふたりはそれぞれの思惑を胸に、荒廃した街を歩きはじめる。最注目作家が放つ圧倒的スケールの歴史ミステリ。